

岐阜分室便り

第14回自然共生河川研究会報告



岐阜分室 室長 大竹 良昌

自然共生河川研究会は、自然と共生した川づくりの一層の展開に資することを目的として、平成7年度から（財）リバーフロント整備センターと（財）ダム水源地環境整備センターとが交互に開催し、本年が第14回となり（財）ダム水源地環境整備センターにおいて開催されました。その内容等について報告します。

今回の研究会は、「ダムによる下流河川へのインパクトレスポンスの解明に向けて～」をテーマとして、ダム下流河川の現状や環境変化に関する研究や報告をもとに、適切な環境の把握やより効果的な保全対策の実施に向けて、今、何が課題なのか、今後どのようなやり方が望まれているのか。について専門家のご講演や会場の方々と議論をされた。

研究会について

研究会は、平成18年1月27日（金）名古屋駅前の名古屋通信会館において学識者をはじめ国、県、市町、法人、一般と約200名の出席により盛大に開催できました。

冒頭、加藤ダム水源地環境整備センター理事長の主催者挨拶のあと、来賓の大村哲夫中部地方整備局長からは、「自然に学び、人に学び、人と自然が織りなしてきた歴史や文化を学びながら、これからの循環型社会を作っていくことを考えなければならない。この研究会が、これからの河川環境の改善といった新しい展開に向けて大きな機会になればと期待している。」とご挨拶頂いた。

◎特別講演 「河川文化の再考」

（財）とっとり政策総合研究所
理事長 道上 正規 氏

日本の河川を考える上で一番庶民的で最も親しまれている民話などで取り上げられている「河童」を題材として取り上げられ、河童は川の淵に棲む想像上の動物ではなく、淵にできる渦を河童にみたてた仮説を、河童の特徴などから明快に説明されました。そして、河川環境を復元するためには、昔の人の知恵と新しい技術を融合させた河川技術の更なる研究が重要な鍵になると講演して頂きました。

◎講演 1 「貯水ダム下流域の底質環境と底生動物群集の特性」

京都大学防災研究所
助教授 竹門 康弘 氏

ダム貯水池では浮遊性の植物プランクトンが大量に発生するため、下流河川では植物プランクトン由来の有機物が増加する。このような底質環境の変化

は、植物プランクトン食の底生動物を選択的に増加させるため、底生動物の多様度は低くなる。しかし、植物プランクトン由来の有機物は、底生動物などの消費



者によって急激に減少していくため、その影響範囲はダム下流3～10km程度であるということ、数多くの調査結果をもとに講演していただきました。

◎講演 2 「ダム湖で増えた植物プランクトンによる河川環境の改変～栄養塩と泥質～」

梶山女学園大学人間関係学部
講師 野崎 健太郎 氏

ダム湖で発生する濁水の発生は、一般に土粒子によるものと考えられているが、矢作川では3～5度程度の植物プランクトン由来の濁度が続いている。したがって、富栄養化対策は濁水の軽減という視点からも重要であるということについて講演していただきました。

◎話題提供 「ダムが下流に及ぼす影響とこれまでの対応」

（財）ダム水源地環境整備センター
研究第三部 五十嵐 崇博 氏

ダムが下流河川に及ぼす影響を緩和するために実施した保全対策について、これまでの事例を交えて話題提供をしていただきました。

◎シンポジウム（座談会）

コーディネーター：道上 正規 氏
パネリスト：竹門 康弘 氏、野崎 健太郎 氏
五十嵐 崇博 氏

パネリストと参加者の双方で議論した結果、現在、ダムが下流河川に及ぼす影響を緩和するために、フラッシュ放流や土砂移動などが実施されているが、その技術を確立するためには、河川工学や生態学等に携わる数多くの研究者や技術者が知恵を出し合っていくことが重要であるとの結論に達しました。

おわりに

第15回は、（財）リバーフロント整備センターが担当させていただきます。竹村理事長からテーマは「山から海までの水循環系」と発表されました。

今回同様、皆様のご期待に応えられるよう努力して参ります。